

# 山と博物館

第54巻 第5号 2008年5月25日

市立大町山岳博物館



金賞 桜と後立山

撮影 竹村 昭八

私たちの大町市は、雄大な北アルプスのパノラマを代表とする四季折々の変化に富んだ豊かで美しい大自然に恵まれています。

北アルプスの山麓で生まれ、育つてきた市民は、その長い歴史を通じて、山岳がもたらす豊かな自然環境の恵みを受けながら、自然と人との共生する独自の山岳文化を形成してきました。

私たちは、先人たちが守り育ててきた山岳文化を受け継ぎ、かけがえのない豊かで美しい自然を次の世代に伝えていかなければなりません。

二十一世紀を迎えた今日、身近な生活環境の改善から地球環境の保全まで、様々な環境問題への取り組みが重視される中で、本市においても、市民、事業者、行政等が協働と連携を図りながら、新しい時代の課題や要求に応える山岳文化の振興が求められています。

本市における山岳文化の拠点である山岳博物館開館創立五十周年の節目にあたり、山岳博物館創設当時の理念に学びながら、「環境の世紀」と言われる二十一世紀にふさわしい山岳文化の発展と創造をめざして、大町市を自然と人との共生する「山岳文化都市」とすることを宣言します。

## 山岳文化都市宣言

# 山岳公募写真展

## アルプス一万尺—岳都大町の山々をめぐる—

### ごあいさつ

平成十四年のことです。山岳博物館の創立五十周年を機に大町は、自然と人との共生する「山岳文化都市」を宣言いたしました。

そこで昨年は、教育委員会、そして観光協

会とともに「山岳フォトコンテスト」を開催させていただきました。これは、日本でも有

数の高山を有する本市の象徴、北アルプスを

テーマとしたもので、参加された皆さまに改

めて大自然の魅力を引き出して作品にしてい

ただくとともに、山岳環境についてその想い

を寄せていただきました。

作品の撮影地は麓から高山に至り、北アル

プスと桜、紅葉、そして極寒の雪中と季節に

応じてバリエーションに富み、本市の魅力を

再発見する作品ばかりで、また、皆さまから

寄せられました山岳環境に対する想いは、私

も深く受け止め、二十一世紀にふさわしい山

岳文化の発展と創造を市民の皆さんとともに

目指したいと思います。

(大町市長 牛越 啓)

### 講評

一般に風景写真と言いますがこの言葉には深い意味を含んでいます。

まず身近な生活を営む周辺から草花や林、森、川、沢、高原そして山々に入るまで多く

### 山岳環境への想い（撮影者からのメッセージ）

の要素があります。この中でも山岳写真はやはり四季にわたり光線（太陽）の動きが大きな役割を果たし、立体感を出す時間帯が重要になります。

写真は「光と影」です。

①ピントがまず良いこと

②露出が適正であること。

③レンズの選定による画面構成で、作者の意図が表現できていること。

入賞作品を観賞する際にこの点を良く見ていただければと思います。

（アウトドアフォトグラファー 近藤辰郎）

受賞・入選

金賞／竹村 昭八

銀賞／林 良一・平瀬 貴志

銅賞／遠藤 鷹一・小野瀬 寿・倉科 隆・

土橋 時代・土橋 道良・速水 三郎・平山 博夫

入選／小松 竹千代・細川 寿美子・丸山 好昭・山下 勝也・横内 俱子

（小松 竹千代／松本市）

### メッセージ

この度は、フォトコンテストとは別に皆さまからの山岳環境に対するメッセージもお寄せいただきましたので、ご紹介いたします。

湯俣からの帰り、高瀬川に仮設道路ができ

ていました。なかなか川の中を歩くことはできないので、遊歩道から離れ川を下りました。思いがけず不動沢が正面に見られます。小雪もちらつくお天気でしたが思い出に残りました。

東電のおかげで、比較的楽に湯俣温泉まで入りますが、その先是体力・技術・経験の必要な山域です。山に入るのに自己責任をぬきにして観光化することには疑問を感じます。

（浦野 秀子／松本市）

冬の澄んで凜とした冷え渡つた大気の中、日の出前の茜色に染まつた鹿島槍ヶ岳を見ると、その神々しさに息をのみ、心が洗われる気がする。

（遠藤 鷹一／大町市）

私は写真を趣味として居りまして山の風景を夜も夜明の時間も撮影しています。

冬になると大町から白馬にかけてスキー場

の明かりで星などの写真が撮れなくなります。

観光産業としてのスキー場ですからしかたがないのかもしれません、せめて夜半からは夏場のようにならぬ様にしてほしいと思います。

また山麓の多種多彩な建造物もその地域の風土に合った型、色彩に近づけられたら（スイスみたいに）と思います。

（小松 竹千代／松本市）

環境が変化すれば、当然それに対応術く、野生本能の知恵というか、それ以外に生きる途（みち）はない筈で、時々人里近くまで出没して世間を騒がせている。防護策を彼は（あれこれ）と試みているようだが、所詮人間の力では敵わぬのが現状であり、物言わぬ野生動物たちは、命懸けのメッセージを我々に投げ掛けているのではないだろうか！

自然か、人間か、堂々巡り論になりそうですが、今更何をと言われるかも知れないが、言うまでもなく、自然の方が先住者なのであって、我々人間は自然界の産物？にすぎず、先住者達の恩恵に肖り浴（よく）するためには、なるたけその機嫌を損ねぬよう細かい配慮が必要となってくるだろう。

そこで山岳環境と一口に言つても、動植物の保護に始まり環境保全など登山人口に至るまで多岐に亘る。範囲が広く深いだけに、これら先どう対処するか大事な課題でもある。

昨今、地球規模での温暖化が取沙汰されてゐるが、異常気象との関連も大きな要因となつてはいなうか、環境破壊は年々加速され、生態系のバランスは崩れて、自然はまさに滅亡に瀕しているのでは？山岳状況を把握しながら、具体的な対応策を考えなければならぬ刻（とき）を迎えていと見えるでしょう。

（斎藤 忠彦／大町市）

鹿島槍ヶ岳は、どこから見ても端正で美しい、中高年をはじめ各層の登山者から人気のある山である。しかし、トイレは種池山荘と

冷池山荘の2ヶ所にしかない。冷池キャンプ場のナナカマドの下と、布引山頂上の信州側には人糞がいっぱいである。これは登山者のモラルの問題ではあるが、山荘の協力が必要だ。宿泊受付の際に「野外での用足し禁止、必ず山荘で用足しをしてから登山開始を」と徹底してほしいものである。また、山荘のトイレを有料でもよいから一般登山者が気軽に利用出来る態勢づくりが必要ではないだろうか。

（坂井 国夫／松本市）

黒部ダム五千万人達成の懸垂幕が大町市役所に掲げられた。北ア



銀賞 早朝の山なみ 撮影：林 良一

昨年の秋、小熊山に以前の撮影ポイントを見たくて出掛けた。車から降りて歩いてみたかったけれど、周りの熊棚の多さに歩かずに入り抜けてしまった。周りの木も大きく育ち以前のように撮れないこともわかった。家の裏山の鷹狩山に通じる林道も二年前までは犬の散歩コースだったけれど、この頃は歩きたくなくなつた。北アを眺めながらの楽しい林道だつたけれど、猪、猿などが出るかわからない。部落では猿を追つ払おうと組織まで出来てい

ここに住み始めた頃はこんなほうまで来なかつたのだけれど、北アの中で棲める環境を作つてやらなければいけないと思う。けれど下界の美味しい餌にありついてしまつたら難しい問題だと思う。

（竹村 昭八／大町市）

鹿島川、籠川、高瀬川の清流、青木、中綱、木崎の仁科三湖の水面に写るアルプスの峰々、写真を趣味とする者にとって何よりもまして贅沢な撮影スポットである。

（永山 秀／池田町）

ルブスと後立山連峰に魅せられて、全国各地から、海外からもここ大町へ訪れている。街から観える山々は、春の残雪の雪型や、夏の緑、秋の紅葉、そして冬の雪化粧。居ながらにして季節の変わり目を感じるとともに毎日の生活に感謝している。色づいた銀杏並木とコントラストも絶景である。

この恵まれた素晴らしい環境を背景にいつでもシャツダーを切り続けたいと思います。

（中川 嘉捷／大町市）

北アルプスの山々が初冠雪し、連なる前山が紅葉に染まる頃、里はまだ色づき始める。所謂白、紅、緑の三段色。そんな素晴らしい晩秋の風景が日々展開されるアルプスの麓に生きる者として、いつまでも目に留めておき

山岳写真は五十歳になつてから始め、主として北アルプスを撮影している。写真を撮る者として日頃気になつてていることは、良い写真を撮りたいとの思いでマナー違反をしている撮影者がいること、またフィルムの包装紙等が登山路に目につく事である。前者のマナー違反による草花やハイマツの損傷には対処出来ないが、山岳写真を撮る仲間の行為として包装紙を拾い持ち帰ることを心がけている。

（林 良一／松本市）

岩がごろごろして足場の悪い急な下り。登山者にとつて大変気をつかう道です。バランスがとりにくく、ストック無しでは大変です。なぜこんな道になつたか？ 雨も雪も降る、さらに登山ブームで多くの人が！ そんな状況ですこしでも登山道を壊さない為には？ その一つとしてどうかストックの先にゴムをつけて下さい。土の上に小さな穴があるとほんとうに心配です。ほんの少しですが登山道の為に良いのではないかと思ひます。

（速水 三郎／新潟市）

自然風景をモチーフに動物、植物、風景を自分なりに表現をしてありのままの写真を撮ってきた。

たい大自然の祭典である。

鹿島川、籠川、高瀬川の清流、青木、中綱、木崎の仁科三湖の水面に写るアル

プスの峰々、写真を趣味とする者にとって何よりもまして贅沢な撮影スポットである。

（永山 秀／池田町）

オゾンや森林の破壊など現象はさまざまである。しかしこれらの現象は地球温暖化に帰結すると言つても過言ではないだろう。



銀賞 夕陽の中に沈む槍ヶ岳 撮影：平瀬 貴志

環境問題と言つても、異常気象、大気汚染、温暖化による影響は山岳においても同様であり、豪雨、干ばつ等による気候変動は山姿を変化させ、その影響がより明確に現れたり見られる。森林や植物の生態系もさることながら、中部山岳に生息する氷河時代生き残りともいえる「ライチョウ」の生存を危惧するところである。

彼らのえさ場であるお花畑や諸々の条件が減少につながり、生き続ける「神の鳥」も生態系が崩れていると感じる。

これからも絶滅の危機にある希少鳥類を観察、保護が重要な課題だと痛感している。

（平瀬 貴志／大町市）

資本主義によって強められた競争主義（＝他人より上へ、他人より速く：）のためか、写真を撮っているところで、よく見受けられるのが「撮るだけ撮つたらあとはもう用は無し」とばかりに、さっさとおさらばする人々の多いこと。

「何のためにここに来たの？」と言いたくなほどの「自然に親しみ、感謝する」より「自分の評価、成績を上げるため」か？何か、一昔前の「モーレツ社員」のアウトドア版だ。

でも、本人だけの意識の問題でもない。

『管理』好きの現代では「キャンプは指定地のみで…」と言いながら、見渡す限り、その「指定地」など見当たらないという所がほとんど。

また、長野県では高山、里山共に、自然とゆつくり親しむための休息（兼避難）小屋など、八坂唐花見温泉口の小屋を例外として他はほとんど無し、というお寒い体制。『さつさと帰る』か、経済的負担の大きい営業宿泊所に泊まれ…という事か？

こういう状況、変革を要しますな。「管理し、管理される」事に安住している意識の変革も含めて…。

（福田 雅人／松本市）

地球温暖化が問題になっている。世界的な異状気象が起こり、山岳環境にしても生態系も変わりつつある。個人レベルで考える事は二酸化炭素の量を減らす省エネ生活をしなければならない。国としては、森林破壊を止め植林をし、CO<sub>2</sub>の吸収を促して地球を取り戻さなければならない。

知人は外国の山へ撮影に行くが氷河が融けて小さくなっていると言う。日本は四季折々の風景があり、特に信州の自然環境はすばら

しい。今を生きる私達は加速する温暖化を本気で考えるべきである。

（細川 寿美子／松本市）

このところ、ペツトをつれた観光客が山奥まで来ているのが気になります。北海道は工

キノコックスの汚染地域で、犬もそれを媒介します。北海道の犬を本州へ、そして山へつれて来る事はとても危険な事だと認識すべきです。これからも水場の水を安心して飲めるべきだと思います。（山下 勝也／長野市）

環境を守るためにもペツトの持込みは厳禁です。

（吉澤 憲良／大町市）

山肌にさわると水がじわっと手の平に感じる。山そのものが生々と息づいていることを実感する。

景観を含めて、この環境を維持管理し後世に伝えることの意義を大町に住める者としてもつともっと実感をもつて考えなくてはならないと思う。

このように大切に思うことを統括推進する所管は何処なのか？

大町市には、環境（景観）保護条例等はあるのだろうか？今は一刻の猶予もならない。もつと山岳文化都市大町たる活動が表面化しなくては、とても世界遺産など云えるものでないと考えている。

（丸山 好昭／大町市）

（山田 要子／大町市）

僕がよく行く船窓小屋の水場は、小屋から船窓岳に向かって10分くらいの不動沢側に有り、毎年崩壊が進んでおり、今後どうなつてしまふのかと思つてしまつ。これも直接ではないにしろ地球温暖化、そして人間の「仕業」なのではないかと思つ悲しくなつてしまつて、環境を破壊することなく写真として残していくことにより美しい思いを新たにしていきたいと思います。（横内 俱子／松本市）

（向井 昭博／所沢市）

北アルプス、後立山連峰の雄大な景観を望む最も好きなポイントは、高瀬川からの眺めだ。特に観音橋西側の臨時ヘリポート付近から電線や鉄塔などの人工構築物の入らない素晴らしい姿が見える。爺ヶ岳、鹿島槍ヶ岳、五竜岳の姿は格別だ。

早春のある朝、鹿島の飛び立つツル（個人的にはハクチヨウに見えるのですが）と駆け下りるシシが見事に浮かび上がり、年に何回も見ることが出来ない澄み切つた青空に、大

環境を守るためにもペツトの持込みは厳禁です。

（横澤 豊／大町市）

山へ登らなくなつて久しいが、毎朝眺める山の姿に四季の変化を感じ、いつまでも変わらない景観をずっと守つていくことを望む。

（吉澤 憲良／大町市）

五月の北アルプスは、大町市の田園風景に似合つた季節である。特に鳴沢岳は左は蓮華岳と右は爺ヶ岳に囲まれ、横に広がりどつしりとした雄姿は屏風的な姿で好きな岳だ。また関電トンネルが赤沢岳と鳴沢岳の間を通り、日本最大の山岳観光ルートとして年間約百万人の観光客を飲み込み、大町市の観光資源の一助を担つてゐる。これまらも永遠に大町市の誇りの岳として、市民に親しまれていくことだろう。

（吉澤 憲良／大町市）

山と博物館 第54巻 第5号

発行 平成20年5月25日発行

398-0002

長野県大町市大町八〇五六一

市立大町山岳博物館

TEL 〇二六一・二二一・〇一一

FAX 〇二六一・二二一・二二三

E-mail: sanpaku@city.comachi.nagano.jp

URL: [www.city.comachi.nagano.jp/sanpaku](http://www.city.comachi.nagano.jp/sanpaku)